

学位論文要約

教育における力概念の研究

—体力概念と学力概念の歴史的考察—

広島大学大学院
教育学研究科 学習開発専攻
D105486 別所秀夫

1. 研究の目的

本研究は、わが国の近代教育制度において、〈力〉を基底詞にした体力、学力という概念の誕生と展開を歴史的に考察し、教育における〈力〉概念が持ちうる意義を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究について

教育における〈力〉概念に着目した研究は、今井康雄らの研究が嚆矢である。今井は、教育における〈力〉概念に関する反省的な議論の端緒を開くことをめざしている。一方、教育において〈力〉概念がもつ意味の検討を、岩川直樹が、「教育における『力』の脱構築〈自己実現〉から〈応答可能性〉へ」として提示している。これら先行研究は、はじまっただばかりである。その意味では、本研究と同時進行している。本研究は、体力、学力が一種の〈力〉であることに着目した、先行研究にはない教育における〈力〉概念を歴史的に考察しようとする新しい試みである。

3. 研究の方法

本研究は、二つの視点を有している。一つは、体力、学力という語の誕生や展開を考察するための「言説」という視点である。言説とは、言語によって書かれたものや語られたことを指すが、そのことがらが語られる前提や文脈を意識的に問題化する視点を生み出すものである。本研究では、体力、学力が語られる社会構造とその変化を読み解くことが、体力、学力言説への着目としてめざされる。

もう一つは、体力、学力を知育・徳育・体育といった教育の全体像からみていることである。その際、教育を「身体」という視点から包括的にとらえる樋口聡の『身体教育の思想』の研究に依拠し、学校教育の中で、児童・生徒の身体へのまなざしの変容が問題にされる。通念的には、知育と体育は異なる教育分野であると理解されている。しかし、樋口の包括的な人間主体を「身体」ととらえる見方からすれば、知育においても体育においても、それぞれの人間主体の経験を統合する場として「身体」をとらえることができる。つまり、近代教育制度発足以来、知育に学力が対応し、体育に体力が対応するという見解の先に、どちらも〈力〉であるということに着目することができれば、「身体」と〈力〉を重ね合わせてみる見方を作り出すことができる可能性がある。それは、人間を断片化された存在をとらえるのではない、全人的な教育の視点の形成につながるものであるという見方である。

本研究の実質的内容は、体力概念、学力概念についての歴史的考察である。これらの歴史的経緯を時間軸に沿って、第Ⅰ部「体力」、第Ⅱ部「学力」と大きく分け、その中で、(1) わが国の近代教育制度成立から第二次世界大戦終結まで、(2) 戦後から高度経済成長期まで、(3) 臨時教育審議会設置から今日までの三つの時期に細分し、それぞれの概念がどのように誕生、展開、変容してきたのかを明らかにする。なお、本論の第1章、第4章は、査読付きの論文を基礎に執筆している。第1章は、『体育学研究』59巻1号(2014年6月、115-131頁)に掲載され、第4章は、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部(学習開発関連領域)』第61号(2012年10月、49-58頁)に掲載されている。

4. 論文の構成（目次）

序章

第1節 問題の背景と研究の目的

第2節 先行研究について

第3節 研究の方法

序章の註

第I部 わが国の近代教育制度における体力概念の誕生と展開

第1章 近代教育制度成立から第二次世界大戦終結までの体力概念

第1節 近代教育制度における「体力」という語の登場と普及

(1) 「体力」という語の登場

(2) 「体力」という語の普及

第2節 体格という通念と体質、体位という語の登場

(1) 体格に置かれた身体の通念

(2) 体質、体位という語の登場

第3節 体力概念の研究—吉田章信『體力測定』—

(1) 力学的体力概念論への着手

(2) 力学的体力概念論の変遷

第4節 国民学校における「体力」の重要視

(1) 厚生省と文部省の体力言説

(2) 国民学校の教育方針と目的、及び方法にみる体力言説

第1章の註

第2章 戦後から高度経済成長期の体力向上政策までの体力概念

第1節 終戦直後の体育をめぐる状況

(1) 体育科から消えた「体力」目標

(2) 「活動力」という語の登場

(3) 1958年学習指導要領と体育科の特徴

第2節 「体力」目標復活の背景

(1) わが国の体力政策と体力研究の展開

(2) スポーツ競技団体の競技力向上政策

(3) 選手強化政策と文部省の緩和政策

(4) 産業経済界の体力向上要求

第3節 学習指導要領における体力の説明

(1) 1968年学習指導要領の体力

(2) 1977年学習指導要領の体力

第4節 厚生省の体力論議の登場

(1) 厚生省の「体力・健康」目標

(2) 「行動体力」から「体力・健康」への変化

第2章の註

第3章 臨時教育審議会から今日までの体力概念

第1節 臨教審の体力議論と学習指導要領の体力

- (1) 臨教審の体力議論
- (2) 1989年学習指導要領の体力
- (3) 「個性尊重の原則」と体力概念の展開

第2節 「生きる力」と体力概念の展開

- (1) 1998年学習指導要領の体力
- (2) 「生きる力」における体力
- (3) 2008年学習指導要領の体力

第3章の註

第II部 わが国の近代教育制度における学力概念の誕生と展開

第4章 近代教育制度成立から第二次世界大戦終結までの学力概念

第1節 「学制」公布と「学力＝知識習得」観の登場

- (1) 「学力」という語の通念
- (2) 「学力」という語の登場

第2節 知識偏重批判と徳育、体育へのまなざし

- (1) 「知徳体」の教育論の提示
- (2) 知育「偏重」から人間陶冶の教育へ

第3節 大正自由教育のもとでの学力のとらえ方

- (1) 「新学校」、自由教育の展開
- (2) 自由教育での学力のとらえ方

第4節 大正期から昭和にかけての科学主義的学力観と戦時下教育における学力観の同居

- (1) 「劣等」、「優等」という「学力論」
- (2) 戦時下の「学力観」

第4章の註

第5章 戦後から高度経済成長を経て1970年代までの学力概念

第1節 戦後の教育制度—戦前との連続性—

- (1) 戦前教育からの継続
- (2) GHQの教育政策
- (3) 教育諸法規の制定

第2節 学習指導要領における学力のとらえ方

- (1) 1947年学習指導要領（試案）の学力
- (2) 試案から1951年改訂後における学力論議
- (3) 1958年学習指導要領の学力

第3節 高度経済成長期における学力のとらえ方

- (1) 占領政策の転換と社会構造の変化
- (2) 1968年学習指導要領の学力
- (3) 1977年学習指導要領の学力

第5章の註

第6章 臨時教育審議会から今日までの学力概念

第1節 臨時教育審議会の設置—その背景と役割—

- (1) 臨教審設置の背景
- (2) 臨教審の役割

第2節 「新学力観」から「確かな学力」への展開

- (1) 1989年学習指導要領の学力
- (2) 「四六答申」と臨教審
- (3) 1998年学習指導要領の学力

第3節 「生きる力」における学力のとらえ方

- (1) 2008年学習指導要領の学力
- (2) 「生きる力」に内包された学力

第6章の註

終章

第1節 研究のまとめ

第2節 教育における力概念の意義

第3節 今後の課題

参考文献

5. 論文の概要

第1章では、わが国の教育制度における「体力」という語の誕生と普及、その後の展開を考察した。教育制度において「体力」という語が初めて登場したのは、“bodily powers”という英語からの邦訳である。わが国では、体力という語は、18世紀初頭に貝原益軒が『養生訓』においてすでに使用が確認でき、邦訳時にこの語が用いられたと考えることができる。この後、体力という語は、『文部省雑誌』や、『教育時論』などにおいて普及するが、この時期、児童・生徒の身体は、「体格」という語の通念のもとに置かれていた。第一次世界大戦後のわが国の社会構造の変化や、諸科学の研究が進む中、学校教育に、「体質」、「体位」という語が登場し、これにより、児童・生徒の身体は、それまでの「体格」という通念に加え、「体質」という語でもとらえられるようになる。こうした中、体質学から<力>という語が付与された体力という語に着目した体力研究が始まる。当初、体力は測定可能な物理的な力発揮としてとらえられたが、後に、測定困難である精神力を含み体力としてとらえられた。この頃、厚生省体力局は、「体力」、「体格」、「体質」、「体位」という語が並存している状況を前に、体力とは、精神力を含めた動的能力としてとらえ、文部省は、体力の実際は精神力が大きな役割を果たすと強調する。このような中、国民学校は、「皇國ノ道義的使命ヲ自覺セシムルコト」という目的を示し、「行」という教育方法で、心身一体を強調し、体力という語を用い児童・生徒の身体に「日本精神」と「強靱ナル身体」を求めた。

第2章では、戦後の体力概念の展開を学習指導要領における体力のとらえ方を中心に考察した。文部省は、1947年6月、「学校体育指導要綱」を示す。この「要綱」によって、戦前、国民学校において重視された体力目標は、体育科から消える。この後、高度経済成長政策と連動した体力政策、1964年の東京オリンピックを契機とした体力研究による「体力の要素」の提示、スポーツ競技団体の競技力向上政策、産業経済界の体力政策などを背

景にして、1968年学習指導要領に体力目標が復活する。この学習指導要領は、総則に「体育」を位置づけ、学校教育全体を通じて「体育」実践を強調する。その結果、全校あげての業間での持久走の奨励、訓練的方式の授業がおこなわれ「体力主義」の指導要領と呼ばれる。この時の体力は、「体力の要素」にある「行動体力」の機能面に重きが置かれ、量として測れ、可視化できる筋力発揮としてとらえられた。ここに、戦前、強調された「精神力」重視の体力のとらえ方とは異なる体力のとらえ方が確認できる。こうした中、体育科は、「体力主義」から「たのしい体育」へと転換が求められるが、1977年学習指導要領は、体力づくり路線を引き継ぐ。一方、厚生省の「健康・体力」行政推進によって、文部省は、「行動体力」に加え、「抵抗力」、「防衛体力」をも重視する。この体力のとらえ方の展開は、体力概念の広がりといえるが、未だ、「身体的要素」のみに体力をとらえるものであった。

第3章では、臨教審後の学習指導要領における体力概念の展開を考察した。臨教審答申全体を貫く基調は、「個性重視の原則」である。この中で、「心」、「精神」が重視される。この臨教審の基本原則は、1989年学習指導要領の体力のとらえ方に変化を生じさせる。その変化とは、これまでの体力は、「身体的要素」のみで説明されていたが、臨教審後の体力は、「精神力」や「心」など「精神的要素」が重視される。つまり、「体力の要素」全体を体力とするのとらえ方への展開である。一方、臨教審の「個性重視の原則」は、競技力に優れている児童・生徒の体力強化策を促進させる。この強化策は、1998年学習指導要領において、「個性を生かす」教育の推進、「素質ある者に一貫した指導」という点において、いっそう増幅する。このような中、2008年学習指導要領の体力は、「知識基盤社会」における「生きる力」を育てるという基本目標の中に置かれる。その結果、体力とは、物理的、生理的、心理的な包括的な人間全体を表す概念としてとらえられるようになる。

第4章では、わが国の近代教育制度における「学力」という語の登場と、その後の展開を考察した。学力という語の登場は、『文部省日誌』（明治5年9月、第4号）において確認でき、この時の学力は、教員応募者の学歴や教育程度を測る文脈においてみることがができる。また、「学制」下では、試験に合格することが重要視され、「知識の習得」が学力としてとらえられる。こうした中、知育、徳育、体育による人格陶冶をめざす教育論によって、知育のみではなく、徳育、体育をも重視する教育への移行がみられる。この後、大正期を迎え、そこでの教育は、わが国の社会構造の変化に伴い、大正デモクラシーや、教養主義が出現する中、「新学校」、自由教育が展開される。ここでの自由教育が、児童・生徒の身体へのまなざしを変容させ、この変容によって、これまでの「知識の習得」を学力とするのとらえ方が相対化される。ここに、学力概念の展開をみることができる。そして、昭和期に入り、1930年代の「新興教育運動」や、人間の諸能力のひとつを「知能」としてとらえ、それを検査によって測り、学力という語で表すという心理学上の学力のとらえ方が示される。戦時期には、「壮丁学力調査」で天皇への忠義を第一とする学力へと収斂される。

第5章では、戦後の教育制度の成立の中、学力はどのようにとらえられていたのか、学習指導要領や、当時の学力論議から考察した。戦後、最初の学習指導要領一般編（試案）は、戦時期の画一的、国家主義的教育の反省から生活習慣や態度を養う教育目標を定める。試案は、1951年に改訂され、この間に、「基礎学力論争」が起こる。この後、国立教育研究所などの学力調査によって、「学力低下」が明らかになり、文部省は、1958年学習指導要領で、第一に「道德教育の徹底」、第二に「国語や算数の基礎学力の充実」を示す。これ

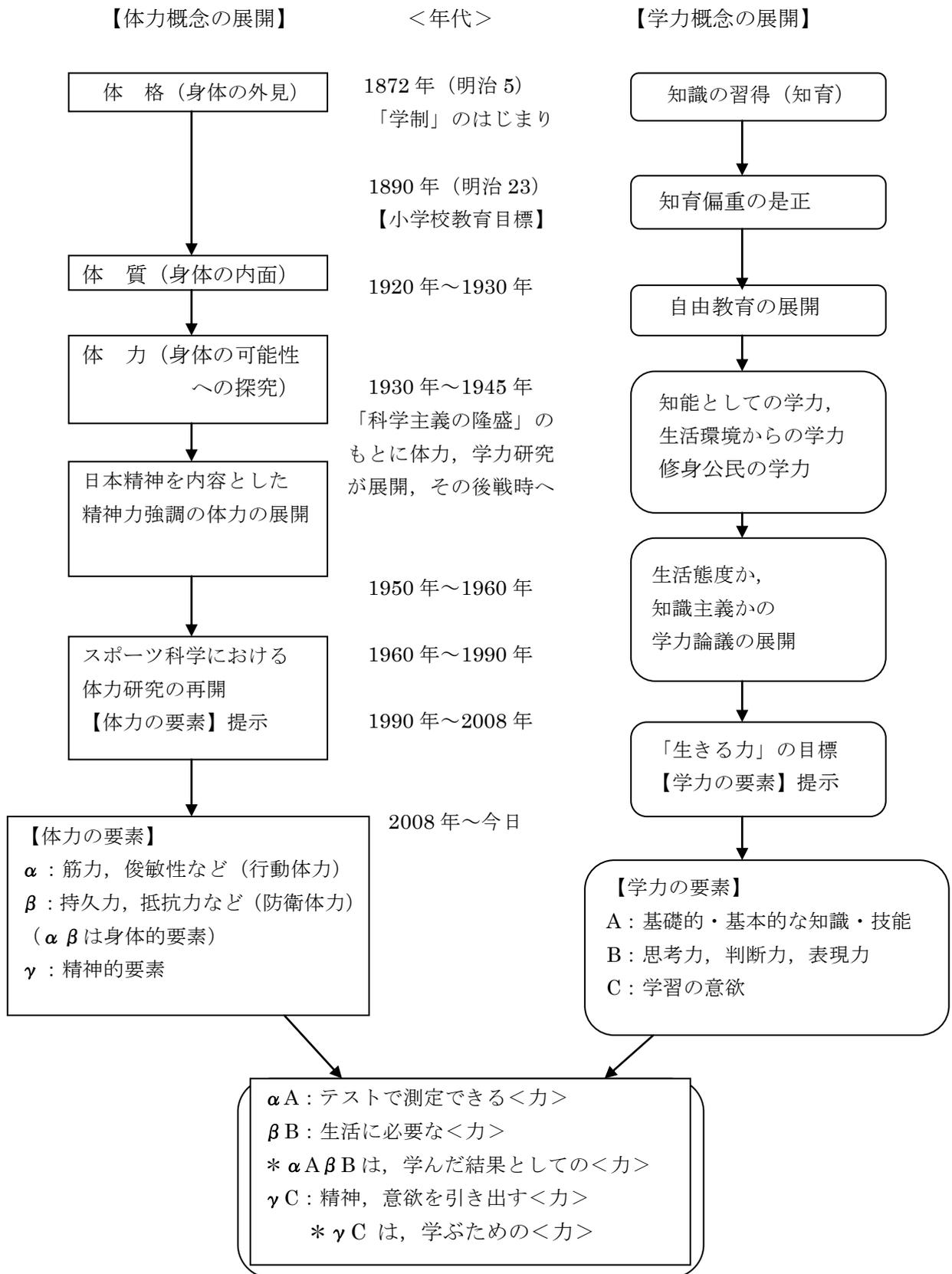
により、文部省は、終戦直後の「生活態度」から戦前の「知識・系統主義」へと姿勢をかえ、このもとで、学力をとらえる。1960年代に入り産業経済界は、科学技術の発展に対応できる「人的能力」の開発を学校教育に要望し、文部省は、「教育内容の現代化」を進める。こうした中、1968年「小学校学習指導要領」が告示され、ここでは、道德教育の「徹底」と、「強健な身体と体力の基礎を養うこと」が強調される。そして、中教審は、1971年の「四六答申」において、占領下での教育政策からの脱皮を図り、わが国独自の「教育改革」を打ち出す。この後、1977年学習指導要領は、「ゆとり」ある学校生活をめざす、その中で、新たな学力論議が起こる。

第6章では、臨教審後の学習指導要領での学力概念の展開を考察した。1989年学習指導要領は、児童・生徒の個性や、関心・意欲・態度が重視される。この段階で、戦後からの学力概念の展開を整理すると、「生活態度」から「知識主義」へ、「知識主義」から「生活態度」へ、再び「生活態度」から「知識主義」へ、そして関心・意欲・態度を重視する「新学力観」への展開をみることができる。この後、1998年学習指導要領は、「生きる力」を全面に出して改訂され、このもとで、「社会の変化に主体的に対応できる能力」を児童・生徒に求める。このような中、新たに「学力低下」論議が起こる。この学力論議の中で、文部省は、2001年に、「学力向上」施策を打ち出す。一方、教育研究者らは、「学んだ結果としての学力」、「学ぶ力としての学力」とする学力論や、学力を1本の「樹」で譬える学力論、「知識理解」「思考力」「判断力」「論理構成力」「意欲」などを「学力の構成要素」とする学力の冰山モデルを提示する。このような中、文科省は、2007年6月に、改正された学校教育法の第30条第2項において、学力を規定する。また、2008年1月、中教審は、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等、③学習意欲、と学力の「重要な3つの要素」を示す。この一連の動きの中に、「新学力観」から「確かな学力」への展開をみることができる。こうした動きの中、学力は、「生きる力」の中に内包される。

終章では、研究のまとめ、教育における力概念の意義、今後の課題を提示した。教育における力概念の意義では、以下のような試行的な考察をおこなった。

体力、学力という語は、ともに<力>を基底詞にしている。<力>とは何か。この問題についての本格的な議論は、今後の課題としなければならない。本研究での両概念についての歴史的考察からわかることは、「体力」も「学力」も、「能力」という<力>と考えられてきていることである。個人や社会にとって有益な能力としての体力、学力は、学校教育で養うべきものとして、教育の目標となる。その実現のために教育実践がなされる時、暫定的であっても、体力、学力の中味が規定されなければならない。それによって、体力、学力を測定、評価し、さらなる改善への努力が可能になる。そこで生み出されるのが、体力テストや学力テストである。こうしたテストによって、測定、評価されるものが、体力や学力なのである。しかし、本研究の歴史的考察で明らかのように、体力にしても、学力にしても、このようなとらえ方にとどまらず、概念は拡張し、変容し、「深化」している。その「深化」を本論の中で明らかとなった「体力の要素」、「学力の要素」を手がかりに考察することができる。以下において、近代教育制度成立からの体力概念、学力概念の誕生から歴史的展開を図によって示し、「体力の要素」、「学力の要素」の融合という関係をみることによって、教育における力概念の意義を考えてみたい。

【近代教育制度における体力，学力概念の誕生と展開から体力，学力概念融合を示す図】



上図の「融合」について説明しよう。「体力の要素」 α の「行動体力」の機能部分、即ち、筋力や俊敏性、柔軟性などは、「学力の要素」Aの基礎的・基本的な知識・技能の習得に対応する。ともに「体力テスト」や「学力テスト」によって測定可能な要素である。これを αA とする。続いて、「体力の要素」 β の持久力、抵抗力は、「学力の要素」Bの知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等に対応する。つまり、測定しにくい、児童・生徒の生活世界にとって重要な要素である。これを βB とする。そして、「体力の要素」 γ の「精神的要素」は、「学力の要素」Cの学習意欲に対応すると考えることができる。これを γC とする。これら αA 、 βB 、 γC を本論でみた「学力論」の議論に則していうと、 αA と βB の一部は、水面上に浮かぶ「目に見える学力」であり、「学んだ結果としての力」といえ、そして、 βB の残りの部分と γC は、水面下にもぐっている「目に見えない学力」であり、「学ぶための力」ということができる。

この視点から、本論での歴史的考察を振り返ってみると、体力にしても、学力にしても、まず αA のレベルでの取り組みがなされている。教育の実践性を考えると、それは自然なことである。そして取り組みの時間の経過とともに、 βB 、さらには、 γC のレベルへの深化が見られる。現状では、それぞれの深化が、体力、学力の枠組みを越えることがない。それは、深化した βB や γC の把握が、いまだ観念的なものに留まっているからだと考えられる。本研究の試みは、 γC の融合態から $\beta B \rightarrow \alpha A$ と辿り直し、 αA のレベルでの両者の連続性を描き出すことだと理解することができるだろう。

このように「体力の要素」、「学力の要素」をもとに、体力と学力を〈力〉として連続的にとらえることには、いかなる意義があるのだろうか。上図からは、まず、通常「知」の表象を「学力」、「体（からだ）」の表象を「体力」として、分離してとらえていることに対する省察が求められるだろう。つまり、学校教育におけるこれまでの国語、数学、英語といった知識教科、体育、音楽、美術といった技能教科の枠組の問い直しがせまられ、児童・生徒の身体に対しホリスティックな見方が要請される。そして、その要請から、新しい体力観、学力観の創出が求められるだろう。通常、何らかの「観念」は、社会的条件と密接な関係のもとで把握されるが、知識教科と技能教科の枠組が問い直されるもとでは、例えば、これまでの体力テストや学力テストで測定されていた能力にもとづく教育観に対し、問題提起を提出することができる。そのことは、これまでの個々の教科のとらえ直しを示唆するものといえる。

例えば、「受験勉強も最後は体力だ」などといわれることがある。それはどういう意味なのか。受験勉強と称されるものは、手短な知識の丸暗記で済むようなものではなく、かなりの時間を、読書や練習問題への解答にとりくむことを求めるのであり、必然的に、持続力が求められ、その持続力は、持久力といった「体力の要素」と関連づけることができるのではないか。持続力とは何か。バッテリーのメタファーが考えられるが、受験勉強を遂行するための持続力は、「電池」とは異なるだろう。目標を立てて、その目標を達成するために、効率的な学習を進め、適度な「休息」を取り入れることができることが、おそらく持続力の実態である。このように考えてみれば、「体力の要素」としての持久力も、1500m走のタイムのよさを意味するに留まらず、生活世界における諸活動にまで視野を広げて、考えてみるのではないか。こうした思いは、突拍子もない夢想ではなく、両概念の歴史的展開の中に、すでにいくらかかなりとも観察されるものであった。現在、この

両概念の融合を、「生きる力」という<力>概念の中に認めることができるのである。すでにポピュラーになった「生きる力」を、体力と学力の融合という実際的な視点から考え直すことを促すこと、それが、本研究で示唆される教育における力概念の意義である。

今後の課題は、本研究で明らかになった体力と学力の融合関係のさらなる究明である。例えば、本論では、1990年代後半以降の「知」に対する見方の変容に十分にふれることができなかったが、体力、学力の【融合図】からは、樋口や王水泉などの「身体知」研究で明らかになった所見を加え、吟味することが求められる。

主要参考文献

青木誠四郎「学力の新しい考え方」『新教育と学力低下』原書房，1949年，5-20頁。

猪飼道夫ら『学校での体力づくり』講談社，1965年。

市川伸一「学力論争における国際学力比較調査の役割」『日本の教育と基礎学力—危機の構図と改革への展望』東京大学大学院教育学研究科基礎学力研究開発センター，2006年，53-69頁。

今井康雄「なぜ、『力』を問題にするのか」『近代教育フォーラム』第18号，2009年，189-201頁。

今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか：教育を語ることばのしくみとはたらしき』新曜社，1997年。

岩川直樹「教育における『力』の脱構築〈自己実現〉から〈応答可能性〉へ」『希望をつむぐ学力』明石書店，2005年，220-247頁。

岩原拓「青少年體位の推移に就いて」『学校衛生』17巻，1937年，431-445頁。

内田健三『臨教審の軌跡—教育改革1100日—』第一法規，1987年。

奥田真丈「小学校及び中学校の教育課程の基準の改善について」『文部時報』No.1205，1977年，22-31頁。

柿沼肇「新興教育運動と『学力』問題」『講座日本の学力1巻教育の現代史』日本標準，1979年，135-164頁。

勝田守一『勝田守一著作集第2巻 国民教育の課題』国土社，1972年。

加藤幸次『『人間中心カリキュラム』への第一歩』『現代教育科学』No592，2006年，68-70頁。

岸本肇「現代っ子の体力の現状と課題」『体育科教育』25巻9号，1977年，23-25頁。

木藤才蔵「国語の改訂」『文部時報』No.973，1958年，17-26頁。

黒田茂次郎・土館長言編『明治学制沿革史』有明書房，1992年。

経済審議会編『経済発展における人的能力開発の課題と対策』大蔵省印刷局，1963年。

国分一太郎「基礎学力の防衛」『現代教育の探究』未来社，1954年。

斉藤利彦『試験と競争の学校史』講談社学術文庫，2011年。

佐藤秀夫『明治前期文部省刊行誌集成第6巻 文部省日誌明治6・7・8・9年』歴史文献，1981年，83-89頁。

佐藤学『学力を問い直す—学びのカリキュラムへ—』岩波ブックレット，2001年。

佐貫浩「21世紀の教育政策と学力問題」『日本教育政策学会年報』8号，2001年，064-078頁。

- 志水宏吉『学力を育てる』岩波新書，2005年。
- 瀧澤利行「近代日本の公衆衛生・労働衛生思想における体力観」『スポーツ社会学研究』第17巻第1号，2009年，15-30頁。
- 田中耕治ほか『新しい時代の教育課程』〔改訂版〕有斐閣，2009年。
- 田中耕治・井ノ口淳三『学力を育てる教育学』八千代出版，2008年。
- 津田左右吉「日本精神について」『思想』第144号，岩波書店，1934年，2-20頁。
- 寺崎昌男『総力戦体制と教育—皇国民「錬成」の理念と実践—』東京大学出版会，1987年。
- 中内敏夫「学力のモデルをどうつくるか（中）」『教育』No212，1967年，81-91頁。
- 中内敏夫『学力とは何か』岩波新書，1983年。
- 樋口聡「現代学習論における身体の地平：問題の素描」『広島大学教育学部紀要第一部（教育学）』第46号，1997年，277-285頁。
- 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房，2005年。
- 樋口聡「教育における身体と知」『大学教育』2007年，70-75頁。
- 樋口聡『「身体知」は体育をどう変えるのか？』『体育科教育』61巻9号，2013年，9頁。
- 樋口聡・山内規嗣『教育の思想と原理—良き教師をみざすために学ぶ重要なことがら—』協同出版，2012年。
- 山内乾史・原清治『論集日本の学力問題上巻学力論の変遷』日本図書センター，2010年。
- 吉田章信「體質に就て」『教育時論』1436号～1441号，1925年。
- 吉田章信『體力測定』藤井書店，1928年。
- 吉田章信『體力測定』藤井書店，1943年。